



人権作文の部

こころづよいともだち……………	2
しぶんをまもる……………	4
じぶんのきもちをたいせつに……………	6
お友だちとのかかわり……………	8
友だちとなかよくするために……………	10
わたしのひいおばあちゃん……………	12
言葉ってむずかしい……………	14
好きな色は自分で決めることができる……………	16
日本に帰って思ったこと……………	18
あきらめないことで気づくこと……………	20
全ての人自分らしく生きるために……………	22
言葉は人をつなぐもの……………	24
私の大好きな言葉……………	26
ぼくにできること……………	28
相手の気持ちを考えて……………	30
おばあちゃんのお顔……………	32
けがを負って気づいたこと……………	34
ジェンダーフリーが進む社会を作ろう……………	36
海外の生活を通して、今思うこと……………	38
LGBTQ～多様な「性」について～……………	40
差別を無くすには……………	42
心を引き裂く凶器……………	44
学校に行きたくても……………	46
障がいへの理解を求めて……………	48
LGBTQ+(プラス)……………	50
差別のない社会……………	52
感謝の押し付け……………	54



いじろづよいともだち

わたしは、いじめられたことがありました。

した。みんなが

男のこたちが、3人で、かってにわたしのことを、

「だいじょうぶ？」

たたいたりしてきました。わたしは、なにもして

と、いつてくれました。わたしはうれしかったで

いないので、かなしいきもちになりました。がん

す。そのおともだちが、先生にいつてくれまし

ばって、

た。そして、先生と、おともだちとはなしをしま

「やめて。」

した。はなしはかいけつして、ちゃんと、ごめん

といったのに、やめてくれませんでした。そして、

なさいをいつてくれました。わたしのからだは、

「うるさい。」

ぽかぽかしました。いつもたたかれたりされてい

と、いわれました。

たから、ごめんなさいをいつてくれて、うれしな

すると、おともだちのみんながあつまってきたま

たです。

それからは、いやなことはしなくなりまし
た。みんなが、

「だいじょうぶ？」

といってくれたから、かなしかったきもちが、ぽ
かぽかにかわりました。ともだちはやさしくて、
こころづよいです。

わたしも、ともだちがいやなことをされていた
らみんなをたすけたいです。



じぶんをまもる

わたしは、「だいじだいじ どーこだ？」という本をよみました。この本は、からだのだいじなところがどこなのか、おしえてくれています。

手、足、耳、おなか。からだは、どこも、とてもだいじです。あたまがだいじなのは、わたしもしていました。あたまをうったりすると、ちがでたり、きをうしなったりします。かんがえるだいなところなので、まもらないといけません。パンツの中は、とくべつだいじです。パンツは、からだのとくべつだいじなところをまもっています。ようちえんのころ、お父さんが、おしえてくれました。しらない人とかが、「見せて。」と

うがをとらせて。「といっても、見せちゃだめ、ということですよ。だいじなところは、ほかの人に、見せません。ほかに、むねや口も、とくべつだいじなところだと、わかりました。

おはなしの中で、「じぶんのからだは、じぶんのもの。じぶんであらおう。」と、かいていました。わたしは、ようちえんのころから、じぶんでからだをあらったり、あたまをあらったりしています。

「だいじなところを見たり、さわったりするのは、じぶんだけだよ。」
と、お母さんも、おしえてくれました。じぶんで

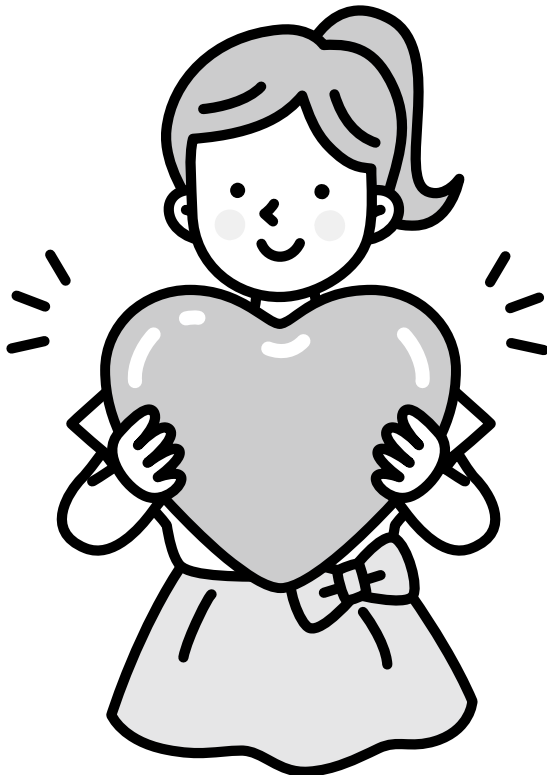
からだをあらって、じぶんでももることができ
て、うれしいです。

わたしは、きをつけていることが、あります。
がっこうとかできがえるときに、人のきがえをし
ろじろ見ないことと、じぶんも見せないようにす
ることです。じぶんもほかの人も、いやなきもち
にならないようにしています。だいじなところを
まもりながら、きがえています。

これからきをつけたいことも、あります。とも
だちといっしょにすごしたり、あそんだりするこ
きは、ぱっとおともだちにさわったりすることが
あります。そんなとき、おともだちはどんなきも
ちかな、だいじょうぶかな、いやがっているかな
と、かんがえたいです。

だれかに、だいじなところを「見せて。」とい
われたら、「だめ、やめて。」とらって、にげます。

そして、かぞくとかにはなして、たすけてもらい
ます。だいじなところは、おともだちとあそびで
も、見せたりしません。じぶんでじぶんのからだ
をまもって、たのしくすごしたいです。



じぶんのきもちをたいせつに

先生が「とりかえっこはっぴょうかい」という本をよんでくれました。その本にでてくる男の子のタロちゃんは、はっぴょうかいでやじゅうのやぐになりました。でも、女の子のなつきちゃんがきるドレスのほうをきたいとおもっていたのです。わたしは、男の子が女の子のドレスをきたがるなんてへんだなとおもいました。

なつきちゃんは、タロちゃんのきもちにきがついで、

「わたしは、タロちゃんのやじゅうのふくをきたいよ。かっこいいとおもっ。」

とって、二人は、ふくをとりかえっこしまし

た。わたしは、二人がいししょうをとりかえっこしたことに、さいしょは、はんたいでした。なぜかというと、男の子がドレスをきるなんてきいたことがないし、女の子が男のいししょうをきているのを見たことがないからです。

タロちゃんのきょうしつのもだちも、

「男が女のふくをきるのは、へんだ。おかしい。」と大きなこえでいいました。タロちゃんたちは、目になみだをうかべながら、

「じぶんがすきなふくをきたい。」

といいました。わたしは、二人がじぶんのきもちをみんなにわかってもらおうとして、いっしょう

けんめいにはなしているのを見て、すごいなおもいました。そして、すきなふくをきてうれしうなかおをしていた二人を見て、それもいいかなとおもうようになりました。

この本をよんでいて、一年まえのできごとをおもいしました。わたしは、青いろがすきで、その日、青いろのふくをきてうれしいきもちでいました。すると、一さい下の男の子から、

「女の子だから、青はにあわない。」

といわれたのです。わたしは、じぶんがすきないろをきてきたのに、かってにきめられるのはいやだとおもい、その子に、

「じぶんがすきないろをきているだけだよ。」

といいました。すると、その子は、あやまってくれしました。

小がっこうのトイレのスリッパのいろは、ピン

クとおおいろの二しゅるいです。女の子だからピンクとはきめられていません。どのいろをはいてもよいのです。

女だから、男だからではなくて、じぶんがどうしたいのかというきもちをたいせつにしたいとおもいます。

お友だちとのかかわり

わたしは、小学校に入ってたくさんお友だちが
できました。まい日、朝学校で友だちに、

「おはよう。」

とあいさつするのがとても好きです。

なぜかというところ、お友だちにあいさつするとい
つもにっこりえがおで

「○○ちゃん、おはよう。」

と手をふってくれるからです。お友だちに会える
のがとてもうれしいです。

学校でお友だちと話していると、うれしかった
り、たのしかったりすることがたくさんありま
す。

でも、ときどき、かなしくなっちゃうこともあ
ります。たとえば、わたしの体のことで気にして
いることをからかわれると、とてもかなしい気も
ちになります。

チクチク言ばや、人をかなしませる言ばや言い
方はたくさんあると思います。

お友だちの気もちをよく考えて、あい手がかな
しくならないように気をつけて話すことは、とて
も大せつなことだと思います。

わたしのクラスでは、かえりの会で「今日のキ
セキ」と言うものがあります。今日のキセキで
は、キセキのよくなったことや、お友だちの

すてきなところを見つけてはっぴょうします。わたしは今日のキセキをとてまたのしみにしています。今日のキセキでは、

「お友だちがさん数の分からないもんだいを教えてくれました。」

「生かつのじゅぎょうのとき、グループで教え合いながらなかよくかんさつができて、すごいな、と思いました。」

など、お友だちのかかわりの話がたくさんはっぴょうされていて、みんなこのじ間をとてまたのしみにしています。

みんながお友だちのよいところをさがしてすごすので、わたしのクラスはみんな、お友だちを大切にしていると思います。

でもときどき、人の気持ちを考えずにつよい言い方をしたり、お友だちのしっばいをわらって

る人もいます。わたしは、こころがくらくらになります。言っている人もしあわせな気持ちになれないと思います。

言はは、あい手の気持ちをよく考えてつかってほしいです。お友だちのこころを大切にすれば、ふわふわ言はもしれんに出ると思います。

これからも、お友だちにやさしく、よろこんでもらえるような言はをたくさんつかって、よいかわりを大切にしたいと思います。

友だちとなかよくするため

わたしは、一学きするとき友だちとなんどもけんかをしました。けんかをすると、かなしい気もちになるし、あいての友だちがなくなるといやな気もちになりました。わたしは、こんなけんかをするのはいやだなと思いました。

一学きの中ごろ、いつもえがおでやさしいAちゃんのとなりのせきになりました。そのAちゃん、みんなにやさしくこえをかけたリ、一人でいる人には、あそびにさそったりしていました。それを見て、わたしにはできないことだな、すご

いなと思いました。

その後、わたしはBちゃんとけんかをしたとき、すごし言いすぎたと思いました。はずかしいけど、じぶんからあやまりました。すると、すくなかなおりができました。それから、Bちゃんとはけんかをしないで、なかよくしています。

わたしは、友だちとまい日たのしくすごしたいです。そのためには、じぶんのことはかり考えないで、友だちの気もちも考えることが大じだと思っています。これからは、じぶんがわるいなと思った

ら、すぐにじぶんからあやまります。そして、友
だちの話をきいてみんなにやさしくでできるようにな
りたいと思います。みんなでなかよくしていき
たいです。



わたしのひいおばあちゃん

わたしのひいおばあちゃんは、今、八十五さいです。一人でおうちにいるのがむずかしいので、ろう人ホームにすんでいます。しんがたコロナがはやる前は、よく会いに行っていました。

ひいおばあちゃんは、わたしたちに会うとないてよろこんでくれます。でも、前に会いに行ったことはおぼえていません。お話をしても、何回も同じことを聞いたりしています。わたしは、とてもふしぎに思いました。なんで今話したこと、すぐ聞いてくるんだろう。お兄ちゃんやお母さんと話してもそんなことはないのに、なんでひいおばあちゃんは同じ話をするのかなあ、と。

ふしぎに思ったことを、お母さんに聞いてみました。

「なんで同じ話を何回もするん。」

そうしたらお母さんが、

「ひいおばあちゃんは、にんちしょうつていうびょう気なんよ。」

と、教えてくれました。わたしはにんちしょうつていうびょう気のことには知りませんでした。にんちしょうつになると、人がわからなくなったり、時間や日がわからなくなることをお母さんに教えてもらいました。ひいおばあちゃんに会うのはたのしいです。でも、何回も同じことを聞かれるの

は、少しめんどくさいと思っています。だけど、
びょう気のことを聞いてから、めんどくさいと
思っていたことがはずかしいと思いました。

「ひいおばあちゃんもわたしと同じ人間で、おか
しいな、かわっているなと思うことはさべつな
んだよ。」

と、お母さんに言われました。ひいおばあちゃん
だけじゃなくて、いろんな人がせかい中にはす
んでいます。目が見えない人、耳が聞こえない
人。みんながくらしやすいせかいになったらいい
なと思います。

つぎにひいおばあちゃんに会ったら、前に会っ
た時よりもたくさんお話をして、わたしのこと
を、おぼえてもらえるようにしたいです。



言葉ってむずかしい

「ばあちゃん、にんちしょうかな。」

と、たたんでくれたせんたくものをタンスになおしながら何気なく言った。それは、とまりに来ていたばあちゃんがせんたく物をたたんでくれた時にぼくのせんたく物の中に兄のせんたく物がまちがって入っていたからだ。それを聞いていたお母さんが、

「その言葉の使い方はちがうよ。」

と言った。ぼくは、なぜお母さんにそう言われたのかわからなかった。すると、お母さんが、
「ばあちゃんはいつもいっしょにくらしてないでしょ。だから、だれのせんたく物かわからな

いと思うよ。それをにんちしょうって言っているのかな。にんちしょうっていうびょう気のことをちゃんと知ってるの。」

と、ぼくに言った。

ぼくは、何気なく使ってしまった言葉を悪いと思った。

べつの日、ぼくはやくそくをやぶってお母さんにおこられた。おこられた後ぼくは、

「じ童ぎゃくだいだ。」

とじょうだんっぽく言った。お母さんは悲しそうな顔をして、

「ぎゃくたいってどんな事か知ってるの。やく

そくをやぶっておこられた事をぎゃくたいって
言うのかな。」

と言った。ぼくはお母さんに、悪い事を言ってし
まったと思ってすぐにあやまった。

するとお母さんが、

「言葉の使い方をまちがうと、悲しくなったり
きずついたりする人がいる事を知った方がいい
よ。」

と、ぼくに言った。それを言われた時ぼくは、ぼ
くも友だちに何気なくいやな言葉、まちがった言
い方をしてないかなと思った。もし言ってたとし
たらその言ってしまった人にあやまりたいと思っ
た。

ぼくは、お母さんに言われたことでたくさん
言葉の使い方を考えることができた。みんなもぼ
くみたいに言葉のむずかしさに気づけたら、悲し

い気持ちやいやな気持ちになる人が少しでもへっ
て、え顔がたくさんふえるからうれしいのにな。

「ああ、言葉ってむずかしい。」



好きな色は自分で決めることができる

ぼくは、少し前まで黒色が好きでした。

赤やピンクは、女の子の色だと思っていました。それと同じように黒や青は男の子の色だと思っていました。

ある日、お母さんと一緒に服を買いに行きました。お母さんは、ピンクのティーシャツを指さして、

「あのティーシャツにあいそうだね。」
と言いました。ぼくが、

「ピンクは女の子の色だから、やだ。」
と言ったら、お母さんが言いました。

「女の子の色とかないよ。男の子がピンクを好

きでもいいんだよ。」

そう言われて、ぼくは考えてみました。

もし、ピンクが大好きという男の子がいたとして、ピンクは女の子の色なんだよと言ったら、どう思うかな？

本当は黒は女の子の色なんだよ。だから、男の子が黒を好きなのはおかしいよと言われたら？

ぼくだったら、悲しい気持ちになるにちがいないと思いました。

お母さんは、

「たしかに、かっこいいとか、かわいいと感じる色はあるけど、女の子でもかっこよくていい

し、男の子がピンクをえらんでも、ぜんぜんお
かしくないよ。すてきな色だな、好きだな、と
思う色をえらんでいいんだよ。」
と言っていました。

世界には、たくさんの色があって、好きな色は
人それぞれなんだな、男の子だから、女の子だか
らとかかんけいがないんだな、とぼくは思いました。

あれから、ぼくは赤色も好きになりました。
かっこいいと感じる黒や青も変わらず好きだけ
ど、赤もいい色だなと思うようになったのです。

学校でも、同じようなじゅぎょうがありました。
た。その時、何色が好きですかと聞かれてぼくは
赤色が好きと答えました。

『好きな色は、男女かんけいなく、自分で決め
ることが出来る。』

もし、ピンクが好きという男の子や、黒が好き

という女の子がいたとしたら、これからは、
「いいね！とってもにあうね。」
と言ってあげられるような人になっていきたいで
す。



日本に帰って思ったこと

私は、お父さんの仕事の関係で三年間、サウジアラビアという国に住んでいました。サウジアラビアに行くまでは「どんな国なのかな」「サウジアラビアの人たちは、どんな人なのかな。」と初めて行く国だったので少し、ふ安もありました。

住んでみると、サウジアラビアはとても暑かったです。最高気温が、40度をこえることもよくありました。そのため女の人は「アバヤ」や「ヒジャブ」といわれる服を着て、肌を守っていました。また、イスラム教では、女の人が肌を見せてはいけないのですが、それには理由がありました。他にも、イスラム教では一日に5回おいのりをしていました。その間は、お店もしまるため最初はびっくりしました。おいのりは、放送でも流れていて、朝5時ごろにも流れるので

最初はびっくりして、起きることもありません。また、食べ物でも日本とのちがいがたくさんありました。サウジアラビアでは、ぶた肉を食べられません。お酒もきん止でした。これは、イスラム教できん止されているからです。暑さや服そうや食べ物など、たくさん日本とちがう所がありました。

しかし、サウジアラビアの人たちはとてもやさしかったです。特に、子どもにやさしいと感じました。スーパーマーケットなどに行くと、「かわいいね。」「日本人?」「いっしょに写真をとろう。」「と気軽に声をかけてくれたり、お菓子をくれたりしました。お兄ちゃんがまいごになったときも、心配してすぐ、けい帯をかせてくれたそうです。知り合いじゃなくても、いつも見守ってくれているような感じがしました。

また、サウジアラビアの人たちは、「日本が好き。」とよく言ってくれていました。私たちが日本人ということをお話すと、「日本人のことをそんけいしてるんだ。」「日本に行きたい。」と言ってくれる人たちがほとんどでした。ショッピングモールには、日本のアニメショップもありました。ショップの中には、ゆかたやマンガやフィギュアなども売っていました。

私は、サウジアラビアは外国なので、あまり日本のことを知らないんじゃないかと思っていました。でも、実さに行ってみるとサウジアラビアの人たちは、日本のことをよく知っていて、アニメショップや日本食を売っているお店もありびっくりしました。

私を通ったようち園では、いろんな国のお友だちがいました。サウジアラビアの人やカナダからきているお友だちもいました。みんなそれぞれちがったけれど、同じ教室でいっしょに勉強し、遊びました。

私は、サウジアラビアに住んでみて、人を見た目ではんだんしたり、知らない国や人だからといって、最初からこわがったりするのはちがうなと思いました。

はじめはふ安があったけど、だんだんとなくなっていったし、サウジアラビアの人は、日本の人とぜんちがうということもなく、とても子どもにやさしかったです。「外国の人だからいっしょに遊ばない。」「日本人だから遊ぶ。」とかじゃないんだなと感じました。そしてサウジアラビアという国と人がとても好きになりました。

私はたとえ国や人がちがっても仲間はずれにしないで、みんなが仲よくわらってすごせるような世界がいなと思います。そのためにもまずは自分が、人を見た目ではんだんしたりきめつけたりして、さべつするのではなく、その人のことをよく知りたと思います。自分からあまり話さない子には、私からせっきよくてきに話すようにして、理かしいあえるようにがんばります。

あきらめないことと気づくこと

わたしは、小学校一年生の頃から、学校で人けん標語を書いています。人けんとは「友だちを大切にすることだと考えていたので、いつも標語を書くときには、そのことに気をつけながら書いていました。しかし、人けんについてあらためて考える機会があり、調べる中で「差別」という言葉に出会いました。高れい者や子ども、外国人などいろいろな差別があることを知りました。その中でわたしが気になったのは、障がいのあつる人への差別です。

わたしは、幼稚園に通っていた時、ろう学校の友だちと歌を歌ったり、一緒に遊んだりして交流する機会がありました。ろう学校の友だちは、みんな耳に何かの機かいをつけていて、その時のわたしには、それが何だか分かりませんでした。ろう学校の先生たちがわたしたちに、

「この子たちは、耳が聞こえづらいから、補聴器という機かいを耳につけているよ。絶対に水にはぬらさないでね。」

と言っていたのを覚えています。わたしはその時に、初めて補聴器というものを知りました。

ろう学校の友だちは、わたしたちに、身ぶり手ぶりを使つて何かを伝えようとしてくれていました。その手の動きや表情を見て、となりにいる先生が、友だちの伝えたいことを代わりに話してくれました。わたしは、「何をしているんだろうか。」「どうして先生は言いたいことが分かるんだろうか。」「とふしぎに思っていました。最後に、ろう学校の先生から「ありがとう」という手の動かし方を習つたときに、それが手話というものだということを知りました。その後も、何回か交流があり、話す機会はあつたけれど、声が聞こえづらいから話ではきないだろうと思ひこみ、自分から声をかけることはありませんでした。

少し前に、テレビで耳が聞こえない人が出てくるドラマを見ました。その主人公は、手話や表情によつて、自分の思ひを伝

えていました。その様子を見ていた周りの人たちは、主人公が何を伝えようとしているのかを考え、主人公の気持ちを想像しながら話を聞いていました。私は、その映像を見たときに、ろう学校の友だちとの交流を自分から進んで行おうとしなかった自分の姿を思い出しました。なぜあの時に自分から話しかけなかったのだろうか。なぜ話すことをあきらめてしまったのだろうか。あきらめの気持ちによって、耳の聞こえない人たちのことを知る機会や考える機会をのがしてしまい、そのことが差別につながっていくのではないかと感じるようになりました。

最近手話の本を借りました。なぜかという手話ができるようになり、ろう学校の友だちや耳に障がいのある人と話ができるようになりたいと思ったからです。その本を読んで、自分の名前や住んでいるところなどの手話を何度も練習し、少しでもできるようになりました。この本をきっかけに、障がいのある人たちについて考える本を借りるようになりました。障がいのある人がどのような生活をしているのか、足の不自由な人がどのような声かけをするか、周りの人たちがどのような声かけをするか、知らないことがたくさんあり、びっくりしました。

障がいのある人たちの生活を考えると、大変なことがたくさん

あり、わたしが簡単にできることでも時間がかかることが分かりました。だから、少しでもわたしたちと同じようにすごすことができる方法を考えていきたいなと思いました。また、幼稚園のころのわたしのように、障がいのある人の生活や困っていることを知らなかったり、話すことをあきらめている友だちがいたりしたときには、知らないことやあきらめることが差別につながるかもしれないということを、しっかりと伝えてきたいと思います。

これから総合的な学習の時間で、福祉について学習していきます。学習の中でアイマスク体験や車いす体験、福祉用具の見学などをします。このような学習を通して、障がいのある人のことをもっと知っていききたいと思います。

これから、たくさん経験や知識をふやしていき、あきらめないわたしでいることができるように、努力をしていきます。

全ての人が自分らしく生きるために

私は今年の二月、お母さんと一緒にトランスジェンダーの方のこうえん会に行きました。大久保あきらさんという女の子で生まれた当時はあきという名前でしたが、今は男性として生き

ている方のお話でした。あきらさんのように自分の性別にいかんがあつて苦しい思いをしている「トランスジェンダー」の方のいろんなことを初めて知りました。ランドセルを自分の好きな色を選べず、入学式の前にランドセルをめちゃくちやにして、お父さんにおこられたと話していました。私がランドセルを買いに行った思い出は、とても楽しくてわくわくしたもので、びっけりしました。私が「楽しい」「好き」と思っていることもつらいと思っている人がいることが分かりました。でも、生まれたときに、男の子、女の子と決められても、自分は「男の子じゃない」「女の子じゃない」と思う人がいると知り、私は自分が良いと思う性別で良いと思えました。けれど、「どちらにも決めたくない」「言いたくない」という人もい

るそうです。決めるかどうか、言うかどうか、自分で決めるいいと思えました。自分のことは、自分で決める権利があると思ったからです。

次に、ジェンダーバイアスといって、性別役割などにたいする思いこみもあると知りました。私は、それは良くないと思います。「女だから料理が出来て当たり前」とか「男なのに料理が出来てすごい」という言葉は、今でもよく聞くことがあります。お母さんが、

『「力仕事は男」とか『家事をするのは女』とかいう決めつけは、社会全体でへってきているし、うちの家でも、お母さんがあせだくになって大そうじをしたり、お父さんがごはんを作ったりするでしょ。』

と話してくれましたが、よその人や、おじいちゃんおばあちゃんと話すと、力仕事は男で、家事は女がするのが当たり前と、思っている人がまだいると感ずります。私は、ジェンダーバイア

スのないかち感をもっていたいし、それが当たり前になってほしいです。

「男らしく」「とか」「女らしく」という言葉もおかしいと、あきらさんのお話を聞いて気付きました。自分の生き方は、性別で決めるのではなく、したい仕事とか、一緒にいたい人とか自分で決めていくことが大切だと思うからです。人それぞれだから、自分がいいと思うことが大切だと思います。

トランスジェンダーのあきらさんのお話を聞いて、私が一番思ったことは、あきらさんはとてもやさしくてすてきな人だということです。子どもころからのうれしかったことも、イヤだったことも、たくさん話してくれました。「何でも聞いてください」といい、私が書いたしつ問にも答えてくれました。トランスジェンダーだとうちあけたときに、最初うけとめてくれなかった家族や、けっこんを反対したパートナーさんのおじいちゃんおばあちゃんのこと、悪く言いませんでした。

そんなとてもやさしい人なのに、差別されるとしたら、おかしいと思います。差別をするのはその人のことをよく知らないからなんじゃないかなと思いました。心と体の性が同じでも、ちがっても、同じ「人」です。トランスジェンダーだからと差別するのは、おかしいです。よく知っている大好きな人を差別

する人はいません。だからみんな、身のまわりの人を一人一人よく知っていけば、だれかを差別することはなくなるんじゃないかなと思いました。

自分が生きたい道を選んで幸せに生きているあきらさんは、とてもかっこ良かったです。私も、性別によってできるできないを決めるのではなく、自分がやりたいことをするのが自分にとって一番幸せなことだと思います。

もし今、人を性別で決めつけたり、差別したりする人が学校や社会にいるなら、私は、差別することのおかしさについて教えてあげたいです。これからも、いろんな人のお話を聞いたり、まわりの友だちのことをよく知って差別が生まれない関係を作りたいと思いました。全ての人が、性別に関係なく、自分が「それがいい」と思う生き方を選べることが正しいと思います。

言葉は人をつなぐもの

小学校に入学してから、今までたくさんの言葉を学んできました。世界には、まだまだたくさんの言葉があることも知りました。その言葉のもつ力はとても大きいとぼくは思います。言葉を使うことで自分の気持ちや考えを伝え、人とコミュニケーションをとることができます。友だちをあげましたり、元気づけたりして助けることもできます。このように言葉は、人をつなぐことができるものです。

でも、そんな言葉も使い方間違えてしまうと、とがったナイフのように人を深く傷つけてしまいます。その傷は目では見えません。しかし、一度つけられた傷は、どんなにやさしい言葉でやさしい心ではげまされても、転んでできた傷のようにはきれいにもとにもどることはありません。

ぼくのクラスでも、言葉で傷ついている友だちがいることが分かり、どうしてそういうことがおきてしまうのか、クラスのみんなまで考えました。友だちを傷つける言葉を使ってしまっている時、その人の心はどうなっているのか考えました。ぼくはきつと、その人の心は、自分の思いどおりにならなくてイライラしていたり、相手の気持ちを考えられるよううがなかったりするのではないかなと思いました。ぼくは傷つく言葉を言われた人の気持ちを考えると、とても悲しい気持ちになりました。

ぼくにも、言葉で傷ついたらけい験があります。相手の友だちは、遊びだと思ってやっていることや、ふざけて言っている言葉でしたが、ぼくにとってはすごく悲しい気持ちになる言葉でした。

ぼくも完ぺきにできているわけではありません。たまに間ちがった言葉を使ってしまうこともあります。だから、努力をして、無くしていきたいです。まずは、自分がかんばろうと思えます。そして、悲しい気持ちになっている友だちを助けられるようになりたいです。

今までのぼくは、休み時間にサッカーなどしていて、言い合いをしている友だちがいたり、とがった言葉を使っている友だちがいても、何も言いませんでした。でも、これからは、みんなで楽しく遊べるように一緒に考えたり、声をかけたりして、傷つける言葉をなくしていきます。

クラスでは、みんなが毎日笑顔で生活できるようにするために、一人一人が相手を思いやる気持ちを持つことが一番大事だと、考えがまとまりました。だけれども、イライラしてしまうと、おこってしまうことはありません。でも、それを相手にぶつけて、心に深いきずをつけてしまうことは、ぜったいにはいけないとみんなが話し合いました。それを忘れないでいたい

と思います。

言葉は使い方まちがえると、人を傷つけてしまうけど、正しく使うと、だれも傷つけることなく、自分の思いを伝えることができます。また、困ったときに話し合い、一緒に解決策を考えることもできます。

言葉を正しく使うことで一人一人を大切にし、みんなの元気と笑顔を守っていけるような、世界になるといいと思いました。

ぼくの「正しく言葉を使う」という一歩がクラスに伝わり、学校に伝わり、少しずつ広がっていけばうれしいです。

傷つきたい人は、一人もいません。

だれかを傷つけていい人も、一人もいません。

みんな、大切にされないといけません。

正しく言葉を使えばみんなを大切にすることができます。

言葉は、人をつなぐもの、人を助けるもの、はげますもの。そのことを忘れず、大切にすることで相手や周りの人の笑顔をふやしていきたいと思えます。

私の大好きな言葉

私は、人に「ありがとう」と言われたり、喜んでくれる顔を見たりするのが大好きです。その反対に、だれかが悲しそうにしていたり、落ちこんでいたりすると、「どうしたのかな？」ととても気になってしまいます。だから、困っている人がいたら助けたいと思いますし、自分にできることは手伝うようにしています。自分の行動で、だれかの喜んでる姿を見ると、こちらまで心がぼかぼか温かくなります。

この前、こんな出来事がありました。コンビニに行った時のことでした。私がドアを開け中に入ろうとすると、同時に入ろうとした人がいました。ふり返って見ると、金のくさりのようなネックレスをした、ちよっと怖そうな若い男性でした。私は一瞬ビクッとなってしまったけど、いつもしているように、ドアを

開けて、

「お先にどうぞ。」

と言いました。すると、その男性は、

「いえいえ、先に行っていていいよ。」

と言いましたが、私はもう一度、

「どうぞどうぞ。」

とゆずりました。そしたら、男性は、

「本当にありがとう。」

とおじぎをしながら言ってくれました。その後私も中に入りました。飲み物を買うつもりで来たけど、その男性のしぐさがうれしくて、その事で頭がいっぱいになって、何を買うのが忘れてしまいそうになりました。

店内で気付いてしまったのですが、その男性は、うでや足にカラフルなタトゥーがあったのです。私は、

二度見するほど、びっくりしてしまいました。その男性は帰る時にも、私の方を見ながら、両手を合わせてぺこぺこ頭を下げながら、笑顔で出ていきました。

もし、最初にあのタトゥーを見ていたら、同じ行動はできなかったかもしれないけど、心の優しいお兄さんだったと思いました。日ごろから親に、「人を見かけではんだんしてはいけない」と言われていますが、その事をよく理かいた出来事でした。

私のあこがれている社会は、みんなが幸せそうにニコニコ笑っていて、人をきずつけたり、悲しませたりすることがない社会です。そういう社会になるためには何が必要なのか、私なりに考えてみました。答えはたくさんあると思うけど、私が思ったことは、「人を思いやる心」と「自分を大切に作る気持ち」です。自分勝手に人々をきずつけるのはよくないけど、自分の気持ちをがまんしてばかりいても苦しくなるから、そのバランスが大事だと思います。

あとは、「感謝する気持ち」も大事だと思います。「ありがとう」と気持ちをこめて言われると、とって

もうれしくて、パワーをもらったような気がします。私も何かしてもらった時は、全力で感謝の気持ちを表して、「ありがとう」いっぱい社会にしたいです。



ぼくにできること

ぼくは最近思う事があります。どうして人は、自分とちがう所がある人をからかったり、いじめたり、仲間はずれにするんだろうと思います。

ぼくには三人の弟がいます。弟が今年、ぼくと同じ小学校に入学しました。その弟は、産まれつき言葉のおくれがあり、そのため同じ年の子よりも理解がおそく、発達のおくれも少しあります。ぼくは弟の入学がうれしくて、色々困った事があったら助けてあげようと意気込んでいました。初めて弟といっしょに集団登校した時の事です。学校について弟を一年生のクラスに送った後、集団登校の同じ班の友だちに、

「○○の弟、何かおかしくない。」

と言われました。ぼくは言葉のおくれがある事を伝えましたが、弟がそう言われてとても悲しい気持ちになりました。

ある日の事です。となりのクラスに転校生がやってきて、ぼくはずっと話してみたいと思っていました。下校の時、いっ

しょに帰れる日があり、初めてその時、転校生と会話をしました。転校生は自分の事を「私」と言っていて少しびっくりしました。会話も少し一方通行でぼくは不思議に思ったけど、話すのはいやじゃありませんでした。でも、いっしょに帰っていた他の友だちがその転校生をからかったり、転校生と話すべくのを仲間はずれにしようとしたりして、すごくいやな気持ちになりました。弟の事もそうですが、どうしても言う事をするのかぼくには分かりませんでした。

ぼくと弟は、放課後デイサービスに行っています。放課後デイサービスには色々な人がいます。弟のように会話が上手くない子やたまに暴力をふるってしまう子、急に外に飛び出してしまう子など様々な子がいます。でもぼくはみんなをおかしいと思った事はありません。みんなそれぞれたくさん良い所があつていっしょに遊ぶと楽しいです。ぼくはどうして人とちがう事をする人をからかったりいじめたりする人がいるのかを考

えました。

ぼくは、今までりょう育を受けたり、放課後デイサービスに行く事で、色んな子を見てきました。車いすに乗っている子や酸素ボンベをつねに付けている子、体がかってに動いちゃう子、弟のように上手く話せない子、目や耳が不自由な子を知っています。そんな子たちをおかしいと思ったり、からかっていたりしてしまつ子は、きっと自分が何不自由なくできる事が当たり前になつていて、その子たちの大変さや苦勞をよく知らないんだと思います。

ぼくは弟が上手く話せない事で色んな事を教えてもらいました。弟は上手く話せませんが色んな感情があります。言葉にできないから分りにくい部分もあるけど、うれしい時はケラケラ笑い、いやな時はすごい顔をして、悲しい時はしくしく泣いたり、大声で泣いたりしています。かまってほしい時はぼくによりそい、おなががすけばぼくの手を引っぱって冷ぞう庫に連れて行きます。弟のように分りにくくても、どんな人にもたくさん感情がある事をぼくは知っています。だからからかわれたり、いじめられたりすればどんな子だって悲しんでいる事をぼくは知っています。ぼくは、悲しくなるような言葉を言われたくないし、言いたくもありません。

それに弟にはすごい所があります。弟は文字が好きで色んな国の文字を書く事ができます。他にも放課後デイサービスの友だちは、電車で詳しく色々教えてくれます。ぼくのクラスの耳の聞こえない友だちは足がすごく速いです。みんなそれぞれできない事もあるけど、得意な事もたくさんあります。

自分とちがう所がある人をからかったり、仲間はずれにする人がいた時に、ぼくができる事は、その子にも感情がある事や、得意な事がある事を知ってもらえるように伝えることです。知っているぼくが、弟のような子たちのかけ橋になれるようにサポートしていきたいです。ぼくは、これからも弟が困っていたらよりそって助けていきます。

相手の気持ちを考えて

ぼくは、サッカーを習っています。ほとんど毎日サッカーの練習に行き、週末になれば試合があります。ぼくのチームは人数が少ないので、ありがたいことに低学年のころから上の学年の試合に参加させてもらっていました。

ぼくが三年生のときに、試合に参加させてもらったときのことを今でもよく覚えています。その試合に勝てば上位パートに進め、負ければ下のパートで試合をすることになる大事な試合でした。ぼくは、点をとるトップというポジションでした。でも、相手の攻撃陣がどんどんせめてきたので、ぼくは点をとるどころではなく、相手からボールをとることに必死になっていました。そんな中でボールをうばうことができたので仲間にパスをしようとしたら、ゴール前にいた相手に

ボールをとられて、そのままゴールを決められてしまいました。点を入られた原因は、ぼくのパスをする場所が悪かったからです。そのあとベンチにもどると、

「○○のせいで負けたやん。」

と言われました。たしかにぼくのパスが悪かったせいですが、同じチームメイトで仲の良い友だちに言われたことが悲しくて、くやしい気持ちがあふれてなみだが止まらなくなりました。ようち園のときからサッカーをしているけれど、みんなの前でなみだを流したのはそのときが初めてでした。自分のプレーがきつかけだったので、

「そんなこと言わんで!!」

と言うこともできず、一人でくやしい気持ちをかかえこみました。友だちのたった一言で、ぼくはものすい

く落ちこみました。そこから立ち直るまでに時間がかかったことも覚えていきます。

ぼくは今、同学年のキャプテンをしています。来年にはチームのキャプテンになるかもしれません。試合で負けることもたくさんあるでしょう。だけど、それをだれかのせいにしたたり、心の中で思っても口に出したらいけないとあのときの経験で学びました。

ようち園の先生が、

「相手の気持ちを考えて言葉にしようね。」

と言っていたのも覚えていきます。キャプテンになればチームをまとめる必要もあります。今はどうしたらまとめることができるかは分からないけど、心がけている事があります。それはぼくと同じようなミスをした子にどういった声をかけてあげるかです。ミスをする辛さを知ってるからこそ、

「切り替えていこう」、「気にするな」

といった前向きになれる声をかけたいと思っています。ミスをした子がせめられていれば、その子を守れるように助けてあげたり、チーム全体でミスを取り返

せるような声をかけるようにしたいと思っています。

ぼくは、辛い思いをしたけど、ミスをせめてきた子とは今でも仲良くすることができています。たしかにいやな思いはしたけれど、サッカーを通してまたその子の良いところに気づくことができました。いやな事を言ってくるから：ではなく、仲直りをするこの大切さも学ぶことができました。

これからぼくは、相手の気持ちを考えて言葉にしていこうと思います。そしてサッカーの仲間とも声をかけ合い、助け合いながらいいチームにしていきたいと思いました。

おばあちゃんの笑顔

私はおばあちゃんと一緒に住んでいます。仕事で忙しい両親に代わって、料理や洗たく、掃除もしてくれます。私が学校から帰ったら、

「おかえり！今日も楽しかった？」

と、毎日玄関まで来てくれます。それから一緒におやつを食べながら、今日学校であった話を話します。いつもにこにこして話を聞いてくれるおばあちゃんが、私は大好きです。

最近、おばあちゃんと話をしていると、

「え？何？」

と聞き返してくることが多くなりました。年を取って、だんだん耳の聞こえが悪くなってきたと言っていました。

この前もおばあちゃんが聞き返してきたので、さっ

きよりも大きな声で同じ話をしました。それでも聞き取れなかったみたいで、

「ごめん、よくわからなかった。」

と言われました。私も何度も同じ話をすることに少しイライラして、

「もういいや。」

と言ってしまった。するとおばあちゃんは、

「ごめんね。」

と、とても悲しそうな顔をしました。それから、突然話しかけられると心の準備ができていないから話を聞きのがしてしまうこと、大きな声で話しかけられると音がひびいてよく聞こえないし、おこられているのかとびっくりしてしまうことを教えてくれました。

私は、大きな声で話せばよく聞こえると思っていた

ので、そうではないと知っておどろきました。また、何回も聞き返すとみんなが不愉快な気分になると思って、聞こえたふりをしていることもあると話してくれました。その話を聞いた時は、周りに気を使っているんだととてもショックでした。すぐに、どうしたらよく聞きとれるのかをたずねました。

今、おばあちゃんと話をする時は、トントンとかたをたたいて、

「おばあちゃん、あのね。」

と最初に言ってから、ゆっくりと話をするようにしています。前よりもスムーズに会話ができるようになってからは、おばあちゃんの笑顔も増えました。ゆっくり話してくれるから内容がよくわかるし、話についていけるのがうれしいと言ってくれました。もっと早くにこうしていれば良かったと思います。

おばあちゃんとの会話を通して、こうすればいいだろうと思いきいものではなく、どうしたらいいのか、相手の気持ちを聞くことが大切だと思いました。自分が良いと思っしていることが、相手にとっては苦痛に

なっているかもしれないからです。もし困っている人がいたら、どうしたらいいかな？と相手が望んでいることを聞いてから行動しようと思います。

今日も家に帰ったら、おばあちゃんと学校の話をするのが楽しみです。今日はおいしかった給食の話をするのかな。



けがを負って気づいたこと

ぼくは、夏休み前にかんばっているサッカーで骨折をしてしまいました。

それから、いつものような日常生活ができなくて、家でも学校でもたくさんめいわくをかけてきました。

松葉づえのせいでランドセルが背負えなくなっていました。友だちが持ってくれたり、階段を一段ずついっしょに上ったりしてくれました。ぼくは、歩くのが遅いのです。トイレのスリッパも一人じゃはけないから、友だちにいすを持ってきてもらってはいていました。

集団登校の班の人たちと一緒に学校に行くのはむずかしいから、お母さんが行きも帰りも車で送ってくれました。学校に着くと教室までついてきてくれて、帰る時も教室までお迎えに来てくれました。

みんなへ、

「ありがとう。」

と言うたびに、心の中で、「ごめんなさい。」が積み重なっていきました。

このような経験のおかげで、今まで気づくことができなかつたことに、気づくことができました。

前の自分は、けがをしている人を見ると、大変そうだなとは思っていました。でも、具体的に、何が大変かを考えようとしませんでした。助けを求めて来たときに助ければ解決すると思っていました。

自分のけがは短期で回復するものだったけど、今回自分がけがをしてみても、これが障がいのある人だったらと考えました。障がいのある人が、自分が思ったみたいに、

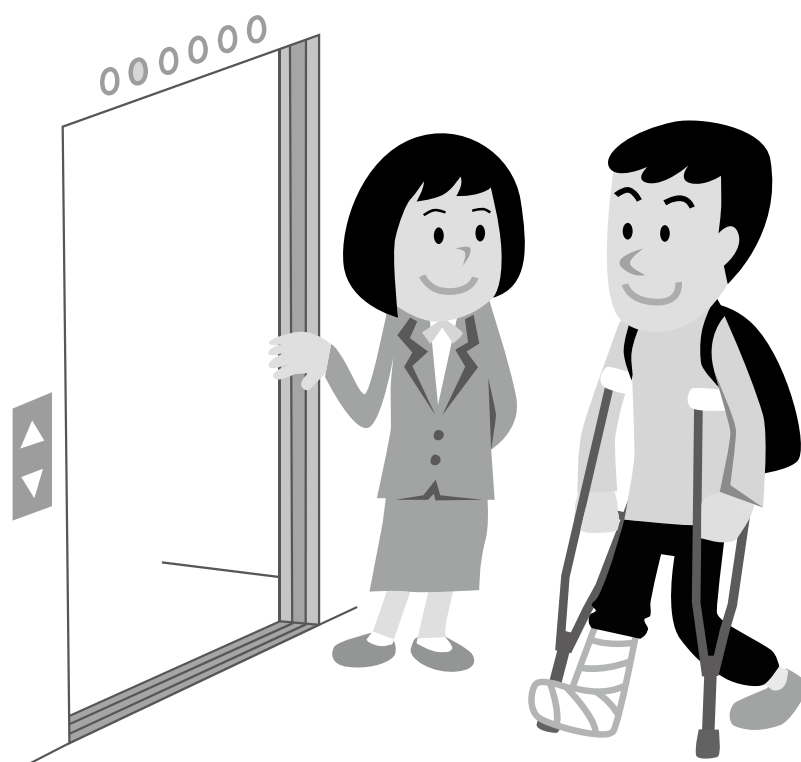
「ありがとうございます。」

と言うたびに心の中で「ごめんなさい。」が積み重なっていると思ったら、とても苦しいと思います。

周りの人は、親切で障がいのある人を助けるけど、してあげるだけでは解決しないと思います。障がいのある人が、一人でできることを増やすと、さっきのような気持ちをいだかずにすむと思います。

ぼくは、障がいの有無にかかわらず、どんな人でも苦しい思いをしないように、一人でできることを増やしていったって、すごくしやすい町をつくっていききたいです。そのために、学校以外にもどこにでもエレベーターをつけたら、足に障がいのある人も人の助けを借りて階段を上らなくても、一人で上の階に行くことができ、安全・快適に過ごすことができると思います。

このように、障がいのある人のことを自分も、みんなも考えていき、どんな人でも安全・快適に過ごせるような町にして、障がいの有無にかかわらず、どんな人も苦しい思いをしないようにしていきたいと、ぼくは思います。



ジェンダーフリーが進む社会を作ろう

私は夏休みの宿題でジェンダーフリーという言葉を知りました。ジェンダーフリーとは、性別による役割にとらわれず、自由に能力を発揮することです。

私は今の社会にジェンダーフリーが必要だと思います。理由は、例えば仕事においては男女両方が育児休暇を取得できる・性別ではなく能力で役職や昇給が決まるなど、ジェンダーフリーを進めることで、おたがいささえながら楽しく仕事ができると思うからです。

しかし今はまだ課題があります。例えば、女性が役職につけないことがあるとのこと。企業によっては、男性が重要なポジションを任されて、女性は管理職に就けないケースがあり、男女で能力に差がないにもかかわらず、女性だからという理由で昇進できないことがあるのです。他には、性別によって賃金差が発

生しています。同じ能力があるにもかかわらず、男性の方が賃金が高いといったケースがあるらしいです。なぜ、男女で賃金がちがうのか。私は、そのことを初めて知り、驚き、疑問にも思いました。そんなことがあってはいけないのではないのでしょうか。社会のジェンダーフリーを進めて、賃金の問題がなくなるということだと思います。

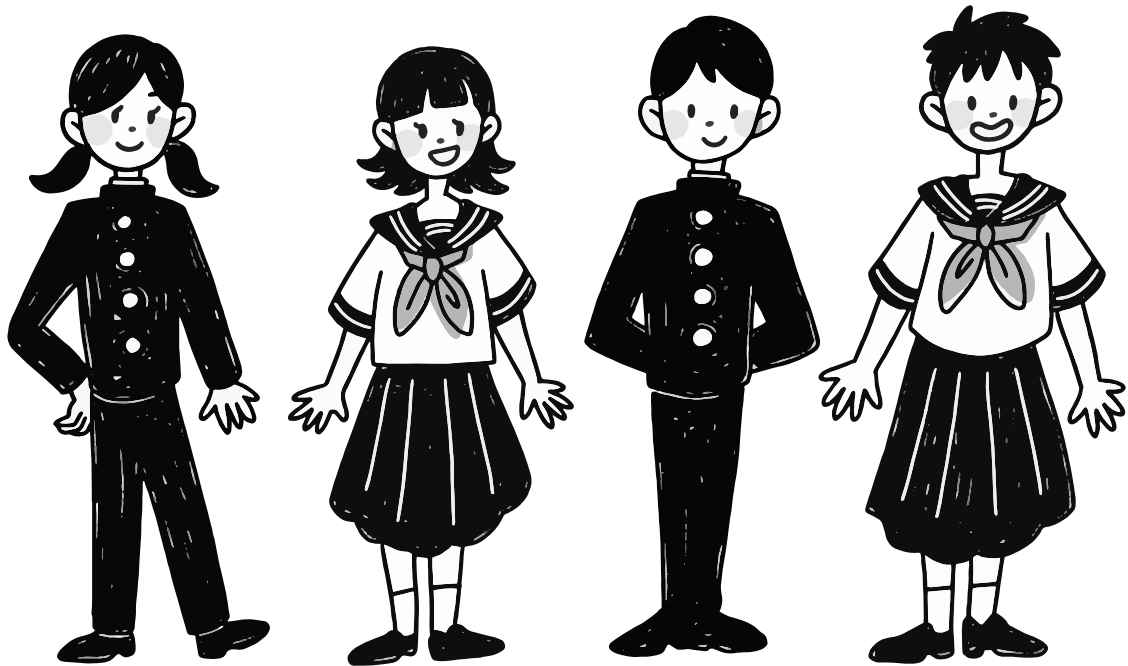
学校など身近にも、何かあるかもしれないと考えるみました。私は男子の方がいいなと思ったことがあります。それはドッジボールです。五年生の時、休み時間に男子がドッジボールをしていました。わたしもしたいと思って友だちをさそいました。でも友だちは、「男子ばかりだから、気まずくていやだ。」

と言いました。わたしもそう思ったし、一人ではなお

さらに入ることができませんでした。なぜ、入れなかったのかを考えると、自分が男子ばかりとか自分は女子だとかいうことを考えていることに気づきました。当時は差別と思っていないなくても、今改めて見直すと「男子は」「女子は」と考えていることに気づきました。

「男子は」「女子は」と自分が思ってしまうことが他にもあります。自由にグループを作る活動があった時などでも女子でかたまることがあります。私は男女関係なく一緒に活動しないといけないと思います。

そのために、私たち自身大人になる前から、身近なところで、男女関係を見直して協力できるようにすれば、ジェンダーフリーにつなげていけるのではないかなと思っています。



海外の生活を通して、今思うこと

私は以前ベトナムという国で暮らしていました。意外と知られていませんが、ベトナムには、少数民族が多く住んでおり、それらの人々は貧しい生活を送っていることが多いです。

ある時、私は家族と行った旅行先で、赤ちゃんをおんぶしながら物を売っている七歳ぐらいの少女から、物を買ってくれと頼まれたことがありました。私よりずっと年下の彼女がそんなことをして、とてもショックを受けたことを覚えています。

SDGsの一つとして貧困をなくそうという目標があります。ベトナムに行く前、日本でしか暮らしたことのない私にとって貧困はあまり身近なものではなく、深く考えたことがありませんでした。しかし、実際に貧困で苦しんでいる人を見てしまうと何か

自分にできることはないのか、と思うようになりました。

ちょうどその頃、私の通っていた学校では、貧困で苦しんでいる少数民族の人々に何かできることはないかと考え、必要なくなった靴を集め、寄付するという取組が行われました。私もその取組に参加し、小さくなった靴をいくつか寄付しました。後日、無事届いたという連絡と共に、一枚の写真が送られてきました。そこには、私たちが寄付した靴をはいて、嬉しそうに笑い合う子どもたちの姿がありました。自分の行ったことが、誰かの幸せになっていると思うと、とても幸せな気持ちになりました。このように、目に見える形で貧困問題にかかわることができたのは、私にとって貴重な経験となりました。

また、これは私が日本に帰国してからニュースを見て知ったのですが、ベトナムを含む世界各国の人々が日本にアコガレ、最近日本を訪れているというのです。それ自体はとても嬉しいことなのですが、日本に外国人が増えた結果、外国人に対する人権問題が起こってしまったっています。沢山の外国人が日本で生活している中で、各国の文化や価値観への理解が不十分であることから、外国人労働者への差別、理容サービスの提供やアパートの入居、飲食店などの店の入店を拒否するなどの問題が生じています。私は、自分がベトナムに住んで、そこで多くのベトナム人から本当に優しく接してもらったことを思い出し、この話を聞いてとても悲しくなりました。

このような差別をなくすためには、文化の多様性を認めながら、お互いに尊重しあって生活することが大切だと思います。私は、自分がベトナム人から受けた恩を、ここ日本で暮らす外国人の皆さんに返していただければ良いなと思っています。



LGBTQ～多様な「性」について～

最近、タレントのりゅうちぇるさんが自殺したというニュースがありました。りゅうちぇるさんは自殺する前、元妻のぺこさんと別れて夫婦という形ではなく、人生のパートナーとなることを選択しました。また、りゅうちぇるさんはぺこさんと別れる時に、自分が性的マイノリティの一人であり、体は男性でも心は女性であることを明かしました。どんどん女性らしく、美しくなる様子を見た人からはSNS上でひどい言葉をいわれ、自分を偽って夫婦を続けてきたことに対する誹謗中傷に苦しんで自殺したのではないかと言われています。

もし自分がりゅうちぇるさんの立場だったら、「誰も自分を認めてくれないのに生きてる意味って何なんだろう」と思いつめてしまいます。

では、どうして誹謗中傷をする人が出てくるのでしょうか。私は、日本でLGBTQなど「多様な性」についての教育や考えが進んでいない事が一つの原因ではないかと思っています。

体の性別だけで単純に判断し、心の性別が違つと自分達との違いを受け入れられず、相手のことを認められないから、平気で追いつめてしまうのだと思います。私は、地球上で一緒に暮らしているなら、互いの性について同じようにきちんと知っておくべきだと思います。でも、私がこれまで学校で学んだことは、そうではありませんでした。一般的な体の違いをみんなが学んだあと、月経など肝心な部分は男女分かれて授業を受けました。そして、LGBTQなど多様な「性」については教えられませんでした。お互いの体のことを理解した上で、心と体の性別が違う人がいることなどを理解するのが多様な「性」の存在を認める第一歩になるのではないのでしょうか。

海外の学校では、「性」についての教育を始める年齢が低く、年に一回は実施され、時間数も多いそうです。そして、同性婚が認められている国も多くなっています。今は、一クラスに二、三人、つまり左利きの人と同じくらいの割合でLGBTQ

の人がいるそうです。それなのに、日本では法的に同性婚が認められていません。私は、結婚は男女関係なくお互いが幸せになるためにするものなのに、どうして性別が同じという理由だけで結婚できなくなり、個人の幸せがうばわれてしまうのかと思います。日本でも海外の進んだ教育を取り入れたり、同性婚に関する法律の整備について考えられるべきだと思います。外国と日本で、同性婚に対して、社会での認識に大きな違いがあるのは、日本の「性」についての教育が外国よりも遅れている事が原因の一つなのではないかと思います。

最近では、インターネットから簡単に情報を得られるようになった反面、「性」に対して誤った知識や認識が植えつけられてしまう危険性も高くなっています。私の身のまわりの人にも性的な言葉をいやらしくとって、面白半分で連呼する人がいます。私は、インターネットの情報が信頼できるものかをしつかりと見極めながら、生活する必要があると思います。そして、学校だけでなく、家庭でも多様な「性」に対して正しい知識を得られる環境づくりが必要だと思います。私は「性」のことやLGBTQなどの性的マイノリティの人権問題について、家族とよく話をします。当たり前のこととして受け入れられるために、家族だけでなく友人達と意見を交換したり、考える時間が

大切だと思います。

このように、一人一人がLGBTQなど多様な「性」についての正しい知識をもつこと、そのことについてお互い意見を言える環境をつくるためには、私自身がもっとくわしくLGBTQなど多様な「性」について知ることが大切だと思います。すぐに社会の制度は変えられなくても、知ることが多様性のある社会を実現するためにできることの一つだと思います。今後、私の身近な友人が自分の性について悩むことがあるかもしれませんが。そんな時は、「世の中にはいろんな人がいるし、あなたと同じような人も当たり前にいるから、悩まないで自分らしく生きればいいよ。」と声をかけ、優しい対応ができるようになりたいと思います。

LGBT (エルジービーティー)
～性的マイノリティを表す言葉のひとつ

L: (レズビアン) 女性の同性愛者

G: (ゲイ) 男性の同性愛者

B: (バイセクシュアル) 両性愛者

T: (トランスジェンダー)
こころの性とからだの性が
一致していない人

Q: (クエスチョニング)
こころの性や好きになる性が
わからない、はっきりしない人

差別を無くすには

「障がい」「や」「障がい者」と聞くとあなたは何を思い浮かべますか？ 普段生活している中で、すれ違ったり接したりしているかもしれませんが、特に意識したことはありませんでした。これまで私は、「障がい」「や」「障がい者」について、何も知らないし、何も考えてこなかったのだと思います。

母に「障がい」について聞いてみたところ、「おばあちゃんは障がい者だよ」と教えてくれました。私は、全く気づいていませんでした。祖母は、先天性股関節脱臼という病気で、幼い頃からあまり運動はできず学校生活を少し制限されていたそうです。そして、母の弟にあたる双子を出産後に、股関節に負荷がかかり、完全に外れてしまいました。その後二回の大きな手術をしましたが、障がいが残ったそうです。現在は、人工股関節を入れて歩いています。祖母は、家事もするし車も運転するし、障がいがあるとは私は思ってもいませんでした。母は、「おばあちゃんの足が悪いせいで出来ないことは、おじいちゃ

んや他のみんなが自然とカバーしているよ。障がいがあってもなくてもみんなでカバーし合いながら生きていくのがあたり前だよ。」
と言っていました。

「障がい」についてインターネットで調べたところ、障がいには、身体障がい・知的障がい・精神障がいがあるそうです。障がい者の中には、職場や学校での嫌がらせやいじめで自殺をする人がいるそうです。

私は、自殺をする人がいなくなるためにも、障がい者への接し方・考え方を変えていかなければならないと思います。障がい者に嫌がらせやいじめをする人は、まわりと違う部分を見て、勝手に劣っていると決めつけているのではないのでしょうか。人と違う事や、人より出来ない事に対して、差別と区別の意味を履き違えているから、自分は、「悪くない」と思い込んでしまっているのではないのでしょうか。差別を無くして、みん

な平等にといいうのは少し違ふ気がします。平等だと考えるからこそ、出来ないことが逆に目立ってしまうのです。元々の能力の差やそれぞれの特性に配慮して、助け合つことが大切です。

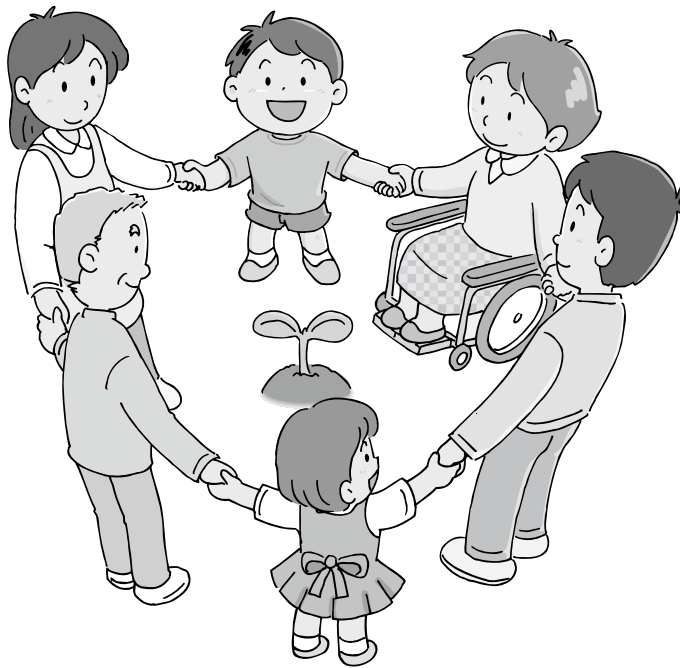
もしも私が障がい者なら、特別視されるのではなく、他の人と同じように暮らしていきたいです。その中で、出来ないことは、人の助けを借りながら、出来そうなことは、ゆっくりでも自分の力でやっていきたいです。周囲の助けを借りることで、自分で頑張っていくことのバランスが大事だと思います。

嫌がらせやいじわるなどで苦しい思いをしている障がい者がいることに驚きました。私は、その方々に対し、出来ないことは助け合ったり、ゆっくりや少ししか出来ないことは、サポートしたり、どうしたらいいのか一緒に考えたり、その人のがんばりを尊重したり、そんな社会になったらいいと考えます。

私にも苦手な事があります。出来ないこともたくさんあります。勉強が得意な人や苦手な人、運動が得意な人や苦手な人、歌唱力が高い人や低い人、それぞれでしょう。それはみんな同じだと考えて、認め合い、協力し合つて生きていきたいです。

私は全ての人が快適に過ごしていける未来を創っていくべきだと考えます。しかし、現実はあるに甘くないかもしれません。私が助けても助けきれない事もあるかもしれません。です

が、どんな時でも、助け合い、補い合つて生きていくというのを忘れずに、だれかの役に立てる強い人間になっていきたいです。



心を引き裂く凶器

それは、いきなり始まった。私が小学五年生だったある日、いつも一緒に行動していた友だちから無視をされた。最初は、

「あれ、聞こえなかったのかな」とあまり気にも留めず、軽い気持ちだった。もう一度大きな声で話しかけてみた。やはり返事はなかった。そしてそれは毎日続いた。私は悩んだ。昨日まで普通に話していたのに。何か悪いことをしたのだろうか、嫌われてしまったのだろうか、もう二度と話すことはできないのだろうか。もう一度、話しかけてみようと思気を出してみるのだが、また同じ反応だったらどうしようかと、これ以上傷つくのが怖くて何もできないでいた。

そんな時、私を救ってくれたのは、同じ経験をしたことのある友だちだった。彼女は私の気持ちを分かってくれた。そしてこの状況を打破するための一歩を一緒にふみ出してくれた。先生からの助けもあり、私を無視した友だちは謝ってはくれたが、今まで通り楽しく話すことができるのか不安な気持ちは消

えなかった。どこか様子をつかがいながら、取り繕いながら過ごしてきた。そして、時間が経った今でも、この出来事がなかったかのようにふるまうことは難しい。よく「時間が解決してくれる」という言葉を耳にするが、そんなことはない。それほど、一度心についた傷は治らないのだ。

「人権」という言葉を聞いて一番はじめに頭に浮かぶのが「いじめ」である人は少なくないのではないだろうか。私はそうだ。今まで学校の授業で「いじめ」について考えたことはたくさんある。でもどこか他人事であった。だが、自分が経験してからは、「いじめ」と書かれた記事や報道に意識的に目がいくようになった。その中でも、非常に衝撃的だったいじめの事件がある。旭川市の女子中学生に対するいじめだ。事件当時の被害者と私の年齢が近いことが事件をより身近なものさせた。この事件はSNSによる脅迫から始まった。脅迫の中身については、とても残酷でここに文字に表すのもためらうほどのも

のである。衝撃、苦痛、怒り、恐怖、どんな言葉を並べても処理できないほど、いろいろな感情が頭の中をめぐる、そんな事件だ。PTSDを発症してしまうほどの出来事。私には想像できない暗闇に彼女はいたのだ。

そもそも「いじめ」はなぜ起こってしまうのだろうか。調べてみると、ストレスの多い環境や欲求不満、違いや多様性を認めにくい状況での正しい不満解消法がもてなかったり、自己肯定感が低かったりして、自分の評価を得ようとして起こることもあるようだ。私自身もストレスを抱えることがある。そしてそれがたまってくると、どこかに発散したくなる。そのストレス発散方法が、まちがった方向に向くと「いじめ」につながるのだと思う。直接的なストレス発散方法を個々でもつことが大切になってくるのだろう。

もう一つ、同じようにSNSでの誹謗中傷によって命を絶ったニュースを見た。タレントのりゅうちえるさんだ。SNSによる誹謗中傷は、現代社会の問題であると言っているだろう。匿名で、相手の悪口を言ったり、根拠のないうそやでたらめを言って他人を傷つけたり、そのようなことをする意味やメリックトが私には分からない。しかし、実際にSNSが原因で命を絶ったり、何気なく発する言葉一つで、人の人生を奪い、変え

てしまう現実があることを考えていかななくてはならない。

私はどうだろう。無意識のうちに相手を傷つけるような言葉を言っていないだろうか。「非常識な行動をとらない」「事実かどうか確信をもてない情報は発信しない」そして、「他人の情報をむやみやたらに公表しない」これらは、誹謗中傷の対策として挙げられていたことだ。今はSNSで簡単に情報を得られる便利さがある一方で、ボタン一つで世界中の人に発信されてしまう危険もひそんでいる。そのことを意識して安全に使っている人がどれだけいるだろう。私たちが発信する言葉は、優しくあたたかく、時に人を救うことができる反面、心を引き裂く凶器にもなることを忘れてはならない。

「人権」について考えることは、難しく、近寄りがたいイメージがあるが、私の体験からも分かるように、実際はもっと身近なところにこそ考えるべきことがあるのではないだろうか。ニュースになるのはほんの一部だ。一人一人がちょっとした優しさでまわりを見ることで社会は大きく変わっていく。これからも私は、相手の心に寄り添い、理解しながら生活していこうと思う。私のようなつらい気持ちになる人が一人でも減るように。

学校に行きたくても

「どうして自分だけみんなと違うの？なんでみんなは元気なの？」

私は小学校六年生のときに体調を崩してから、こんなことばかり考えていました。私も元々は、みんなと同じように、朝早く学校に行き、授業を受け、昼休みは友だちと外で遊んでいました。それが当たり前で、毎日楽しい小学校生活を送っていました。

しかし、卒業まであと半年というところで、私に異変が起きました。

それは二学期が始まって間もないころでした。いつも通りに登校した私は、一時間目の授業の準備をしていました。急にお腹がかゆくなったのです。その時はまだ我慢ができるくらいだったので、六時間目まで授業を受け、友だちと帰りました。しかし、家に帰ってもずっとかゆみは治まらず、早く寝ようと布団に入りました。ところが、かゆみは悪化して体中に尋麻疹が出始め、それが一晩中続きました。あまりにもかゆみが続く

ので、次の日は皮膚科に行き、薬をもらいました。一週間しても治らず、さらに強い薬をもらい、様子を見ました。かゆみは治まったものの、それだけでは終わりませんでした。今度は熱が高くなったり、体がだるかったりと別の症状が出始めたのです。急いで病院に行って検査したものの、理由が分からないまま、体調が良くなることを願うばかりでした。

それからずっと体調が悪く、家から出られませんでした。両親は私を無理やり学校に行かせようとしていました。今度はそれが私にとってストレスになりました。学校に行きたくても行けず、親からはそのことで責められているような気がして、この時期、私は一人できみしくて辛かったです。

でも、このままではいけないと思いました。これでは、最後の小学校生活をみんなと送れないままに終わってしまう。それは嫌だったので。だから私はもう一度学校に行くことを決め、教室へ戻りました。すると、同じクラスのみんなが拍手をして迎えてくれました。自分の中では何か一つを乗り越えたよ

うな気持ちでした。それから、毎日、途中からでも学校に行き、修学旅行にも行くことができて、無事に卒業しました。

中学校に入ってから、学習ルームというところに通いながら、教室に行ったり、授業を受けたりしています。学習ルームに通ってみてわかったことは、つらい思いをしている人がたくさんいたことです。今までは不登校の人についてあまり考えたことがなく、関わることもありませんでした。しかし、学習ルームに通うようになって、つらい思いをしている人がこんなに多くいることに気づきました。初めは慣れませんでした、話しかけてみると、たくさん話してくれるし、みんな優しく、いつの間にかお互いがここに来るまでの経緯などを話すようになります。お互いの過去を知っていくと、いじめにあっていたり、何らかの事情で教室に入れなかったりでした。私はみんなの話を聞いていると、なんだかこちらまでつらくなってきました。なぜなら私も、体調を崩す前に、ある女の子から嫌がらせを受けていたからです。話に入っただけで嫌がられたり、自分に気に食わないことがあったら、私にずっとストーカーのようについてきてしつこく何か言ってきたりと、そういうことが続いていました。

しかし、先生に相談したら、先生のいない時にまた同じことが起こるだけだと思い、相談もできませんでした。また、両親

にも迷惑をかけたくなってずっと一人で抱え込んでいました。

でも、中学に入り、学習ルームの仲間に出会ってから、こういったことを話せるようになりました。中学校生活が楽しいと思えるのは、相談できる人がたくさんいるお陰だと思いました。あの時、一歩踏み出してよかった。つらかったけれど、そういうこともあったお陰で、友だちもたくさんできて、私は今幸せです。

私の将来の夢は、デザイナーかイラストレーターになることです。絵は描くだけでなく、メッセージ性のある絵を描きたいと思っています。だから、絵を学べる高校へ進学したいと思っています。

今は、そんなことも考えられるようになったので、学校に行くのが嫌だと思っていたり、行けなかったりする人には、誰か相談する人を見つけられるといいなと思います。自分から相談することが出来なかった私は、クラス替えまで我慢をしてみました。でも、我慢するだけでは、問題は解決しません。ずっと一人で抱え込み、マイナス思考なままでいるのではなく、誰かと一緒にポジティブ思考に変えていってほしいです。一歩前へ、無理をせず、少しずつでよいので、踏み出してみてください。

障がいへの理解を求めて

この作文では障がいについて口頭自分が感じていることを書くことにする。

まず、世の中にある様々な障がいや障がい者に関する本や記事を読んでいると少し違和感を覚えることがあるので、その違和感について述べる。

どうして違和感を覚えるのかを考えると、障がい者である自分の経験と、多くの本や記事に書いてあることに違いがあるように思うからである。多くの本や記事は、いわゆる健常者が書いているので、障がい者である自分の考えや感じ方とは少なからず違いがあると感じる。

その違いとは、本や記事に書いてある障がい者がとる行動や思考だ。たとえば、ADHDの特徴とされる「衝動的な行動」や「じっとしてられない」「というの個人差があるように感じる。実際に自分は、「衝動的な行動」は多いが、「じっとしてられない」というのはあまりなく、同じADHDの友だちは

「衝動的な行動」が少なく、「じっとしてられない」ということが多かった。これらの特徴は、ADHDではない人もあてはまることがあるのでこれにあてはまる人を障がい者だというのは少しおかしいと思う。

もう一つ感じている違和感は、障がい者を「可哀想な人」と言う人が多くいるということである。障がい者である自分はあるがままに生きていただけなので、少し悲しくなってしまう。

自分が、一番疑問に思い、なくなっほしいと思うものが、障がい者への差別である。差別を受ける上で辛いのは、「じっとしている方が自分が差別をしている」というのを自覚していないことである。差別を受けている方は辛いのに、差別をしている方は「差別をしている」という自覚がないので差別が続き、最悪の場合は差別が他の人にも広がっていくということがある。差別をしている方が、「自分が差別をしていた」という自覚をもつまで、差別を受けている人は半永久的に差別を受けることに

なる。これを根本からなくすには、まず「障がいについて知る」ということが必要である。幼いころから障がいについて知り、障がいは悪いことではないということを知ることができたと自分は思う。

そこで、障がい者が社会でしてしまったり感じたりする事を自分の体験から二つ述べる。

一つ目は、自分は一生懸命努力をしても仕事で周囲の足を引っ張ってしまつたということだ。例としては、班や委員会の仕事で、やるべき事を覚えられずにパニックになってしまい、結局何もできないまま終わり、先生や友だちに怒られてしまつたということが挙げられる。

二つ目は、これにより、周りから「無能」や「サボリ魔」という陰口を言われ、自分でも「何で人と同じことができないのだろう、何で自分はこんなにダメなのだろう」と自分自身を責めてしまうことである。これはまだ自分に障がいがあると分かっていない人によくあるし、実際に自分もそうであった。たとえ自分に障がいがあると分かっても、他の人たちから「ただの言い訳だろ」「ただ努力不足なだけだろう」と言われ、精神的に追いつめられ、うつ病になる人もいる。他の人は、障がいを言い訳にしていると思っても、本人にとってはどう

しようもないことであり、努力しても多くの場合、上手くできない。これは、障がいのことが社会に広く知られておらず、浸透していないことを示している。

一方で、最近では学校等で障がいのことについて学ぶ場もあり、差別は少しずつ無くなっているように感じる。また、自分がどうすればいいか等の相談を親身になって受け入れてくれる先生や親、友だちがいるので、自分自身の困りも減り、前よりも随分過ごしやすくなっていると思う。

自分は、これからも、こうして作文を書いたり発言をしたりして障がいや障がい者への理解を広げ、差別をなくしていきたい。

LGBTQ+プラス

世界には、色々な差別があるが、私は今回、LGBTQ+プラスについて書いておきたい。

「性のありよう」「身体の性(生物学的)」「心の性(性自認)」「好きになる性(性的指向)」「表現する性(性表現)」「の四つの要素で考えることがある。四つの要素から考えると、男や女という言葉では表せない立ち位置の人もいる。私たち一人ひとりに自分の「性のありよう」がある。

しかし、このように理解している人はそう多くない。学校などで、性の多様性に関する授業が増えてきたおかげもあり、多少は増えたと思うが、まだまだ世の中全体に広がっているとは言えない。

私は「身体の性」は男性だが「心の性」は女性寄りだと思っている。「好きになる性」は、男性女性どちらとも魅力的で大好きだ。しかし「表現する性」については、自分でもどちらなのか分からない。なぜなら、「心の性」について、自分の体に少

し違和感のようなものを感じていて、一日をすごしていて気持ち悪くなる時があるからである。「好きになる性」については、

どちらの性も友だちとしてではなく異性として好きに似た感情になっている。このことは今までおかしいことだと思っていたが、LGBTQ+プラスを知った時に、自分だけではなく、自分と同じ人もいるんだと思い安心することができた。私は「表現する性」についてはよく分からないことが多い。男性のような行動をする時もあれば、女性がとりそつな行動もあって自分でもどっちなのか分からない。

私はLGBTQ+プラスを知る前から男性も女性も好きになることをはずかしく思ったり、かくしたりすることがあまりなかった。それは、周りの人達にすくわれてきたからだと思う。私がこのことについて話した時、周りの友だちは一切「気持ち悪い」などのことを言わず、親身になって話を聞いてくれた。そんないい人達に恵まれたという自覚がある。家族につい

でも同様で、変などと言わず私を認めてくれたことが、私が自分を曲げずに、そして偽らず過ごせた理由だと思っている。しかし、みんながみんな簡単に認めてくれるわけでもなく、なかには直接「気持ち悪い」と言う人もいた。私も何回も泣きそうになることがあったが、そんな時でも、ずっと私のことを支えてくれたのが、さっきの友だちや家族だった。しかし、悲しいことに私を支えてくれた友だちとは、中学で離れ離れになってしまい、私は今の学校では、あまりこのことについて相談できる友だちがいない。少しきゅうくつな生活になったと、感じている。誰にでも話せる内容ではないし、授業でやっていたとしても、性の問題について、本当にそういう人達がいるということを理解できないかもしれないからだ。

私は「LGBTQ+」(プラス)が、世間で認められるようになるために、自分を曲げないことを徹底しようと思う。なぜなら、私のような性の悩みをもっている人は多いと思っているからだ。しかし、その中の多くの人が、性の悩みを人に話さず、黙ったまま過ごしていると思う。だから、私は、そんな人達が自分のことを思う存分に表現出来るような社会にするために、私は少し勇気を出して生きてみようと思う。その上で勘違いしないほしいのは、私も怖いということだ。人と違う、た

だそれだけで怖い、私は運がいいことに人に恵まれた。私を応援してくれる人がいる、背中を押してくれる人がいる。私はラッキーだと思う。だから、私に似た性の悩みをもっていて、周りに相談する勇気がないという人がいるのならば、私が少しでもそんな人達に勇気を与えられるようになりたい。そのためにも、この性の悩みをかくさず、堂々と生きることが、大切なことだと考える。一步一步少しずつふみだして行こうと思っている。そのためには、講義や授業だけではなく、学級活動の時間などを使って、子どもにいいに教える時間や機会をたくさん増やしていくべきだと思う。

「性のありよう」は、個性があるのと同じように、みんな違うはずだ。この事実を誰もが望んでいるはずだから、このことが当たり前の世の中になってほしい。そしてそのために、近くにいる友だちの一人一人を大切に受け入れていきたい。

「LGBTQ+」(プラス)

「性のありよう」はとても多様であることから、
+ (プラス) を付けて表現することもある

差別のない社会

「差別心は、誰の中にもある。」

これは、実際に部落差別を受けていた方がおっしゃったことです。私が中学校二年生のとき、部落差別を受けていた方の人権講話が学校でありました。その方はとても明るく話していましたが、とても悲しい話でした。小学校のときに、ひどいじめを受けていた経験の話でした。その方は、私たちにその時の気持ちを伝えようと、一生懸命話してくれました。でも、その時の私は、部落差別が何なのかもよく知らず、あまり実感がわきませんでした。それに、自分は差別をしていないから関係ないと思っていました。しかし、その後「はじめての部落差別」という本を読んで部落差別についてさらに学んでみると、自分と差別は関係ないと思っている人こそ、差別に対しての意識が低く、差別をする可能性が高いのではないかと考えるようになりました。実際には、差別は身近にあり、関係の無い人なんていないのです。

差別をなくすために大切だと思うことが二つあります。

一つ目は、人と人を比べずに、互いに認め合うことです。出身地や人種、性別などにこだわり、他の人を見下すことで、自分が優位に立とうとするから、苦しむ人がでてくるのです。このようなことは、自分さえよければ他の人はどうでもよいという考え方から起こるのだと思います。自分が困らないように自分を守ることは、大切なことです。しかし、だからといって、他の人がどうなってもよいという考え方は、絶対に間違っています。自分よりも下の人をつくって安心するのではなく、自分と誰かの違いを理解し、よさを互いに認め合うことが、差別をなくすことにつながると思います。

二つ目は、見て見ぬふりをしないことです。「関わりたくないから」と、見て見ぬふりをしている人たちがいます。多くの人が差別はおかしいと声をあげれば、差別の問題をそのままにしておかず、解決しなければならなくなります。差別は、間

違ったことを間違っているとさえ言えない雰囲気がある所で、行われているのではないかと思えます。それに、人間は皆仲間を見つけたという気持ちをもっているのです。一人だけ違う行動をとって目立つのは嫌なのだと思います。しかし、見て見ぬふりは、絶対に悪いことです。悪いことを悪いと言えない雰囲気づくりをすることが、差別をなくすことにつながると思います。

差別をしている人は、きっと自分の認識を信じているのだと思います。自信をもつこと自体はよいことですが、「自分は百パーセント正しいのだ」と思い込んでしまうと、周りが見えなくなってしまう。差別をしている人は、自分の認識や行動が本当に正しいのかを一度疑ってみる必要があります。しかし、それでも差別をしていることに気付けない人がいます。その時は、周囲の人が指摘することが大切です。

差別は、とても身近にあります。だからこそ差別を無くすことは、とても難しいと感じます。でも、自分と他人の違いを認め、比べないことや、見て見ぬふりをしないことで、差別をなくすことができると思います。

私たちは、この先の未来に差別の心を残すようなことをしてはいけません。私は、辛い思いをする人がいなくなるよう、人と人を比べたり、偏見をもったりしないようにします。困っ

ている人がいたら、それが誰であれ助けなければなりません。そして、「自分の都合だけでものを考えるような人」ではなく、すべての人を大切にし、おかしいと思ったことにきちんと立ち向かえる大人になりたいです。

声をあげれば聞いてくれる人がいます。指摘されれば気がつくことができる人がいます。それで救われる人がいます。差別は一人では無くせません。でも、たくさんの方の力で無くすことはできます。だから私は、困っている人の立場で考え気持ちを理解し、勇気をもって、間違ったことを間違っていると伝える人になれるよう、努力します。そのために、「差別心は、誰の中にもある」という言葉をいつも意識し、無意識のうちに差別的な考え方や発言をしないようにします。

感謝の押し付け

「自分は立ったままで大丈夫なので。おばあさん扱いしないでください。」

小学生の頃、私が友だちと電車に乗っていると一人の高齢の女性と二人の女子高校生が乗ってきた。高校生は私達のななめ前にすぐ腰掛けたが、女性は席が空いているにも関わらず立ちままだった。いくら手すりに掴まっているとはいえ、高齢者だけのために心配になった。学校で高齢者には席を譲りましょうと習ったばかりの私達は声をかけようかと話していると、高校生が先に声をかけた。

「おばあさん、大丈夫ですか。席お座りになられないんですか。」

当時小学生だった私はとても丁寧な敬語に驚き、さすが高校生だなと思った。しかし女性は無言だった。耳が遠いと思ったのか、高校生が女性との距離をつめ、ゆっくりと繰り返し始めた途端女性は怒鳴り始めてしまった。しっかりと覚えていな

いが、一番はっきり記憶に残っているのは最後の

「自分は立ったままで大丈夫なので。おばあさん扱いしないでください。」

という言葉だった。女性はそれからそっぽを向いてしまい、高校生は少し怒りながら席に戻っていった。

「せっかく声かけてあげたのに。」

「もうほっとこ。」

そんな会話が聞こえた。私もその通りだと思った。高校生は親切だったのに、なぜ女性が怒っていたのかわからなかった。

結局女性が席に座ることはなく、二駅程して下車していった。

それからその出来事を忘れていたが、最近になって障がい者のインタビュー記事を見た。ある盲目の女性が「世間に向けて」という趣旨の質問を受け、

「感謝の押し付けをされているようでどうにも。勿論助けが必要な時もあるし、とてもありがたいです。声をかけてもらえ

ると安心できるし。でもたまに、断ると舌打ちや罵倒をされるんです。せっかく声をかけてやったのにと。断りつらくて頼んでみても、こちらの戸惑いが伝わるのでしょうか。もっと感謝して欲しいなどと遠目になってから言われて。それからどうにも感謝の言葉を待っているように感じてしまって。」

この時、電車内での出来事を思い出した。断ると舌打ちや罵倒、高校生も不満をあらわにしていたし、私自身も同じ考えを抱いていたなと思い出した。ある車椅子の男性は

「自分は座っている状態で過ごしていて物理的にも人より下で過ごしています。だから余計に横柄な態度を取られると自分には下なんだなと感じてしまいます。確かに助けは必要なのですが、どうしても上から感じてしまって。」

感謝を求められるというのは大きなプレッシャーであることがわかった。威圧感をあたえてしまっただけ、それはすでに喜ばれることではなくなるのだろう。

思えば電車内での出来事は、女性への一種の差別なのかもしれない。私も、きっと高校生も「高齢者は助けてあげるもの。支えてあげるもの。感謝される覚えはあっても怒られる覚えはない。」そう、無意識に考えていた。女性はしっかり手すりに掴まっていて、揺れで転倒する様子もなかった。女性が高齢で

なければ、きっと気にも留めなかっただろう。あの時女性は高齢という見た目だけで判断されたことが我慢ならなかったのかもしれない。少なくとも私は、女性に対しての心配ではなく、高齢者というまとまりで女性をみていた。

「〜してあげる。」

この時点で相手を対等に見ていない。確かに弱い立場の人を救うことが必要とされている社会で、どうしても上から目線になってしまふ場面はあると思う。勿論、困っている人がいたら助けるべきなので、あの高校生が起こした行動自体は良いことだろう。ただ、その後の言動から感謝の押し付けが感じられたことは問題だと思う。重要なのは相手を高齢者など「助けが必要な人」と一括りにするのではなく、一人一人に向き合い、対等に接することなのではないかと考える。一括りで考え、上に立っているつもりになっては、人種差別や男女差別などの差別問題と変わらない。

これからは相手自身を見て、助けを必要としているようなら躊躇せず、同じ目線で声をかけることを大切にしていきたい。

作文を掲載させていただいた方（あいうえお順）

阿部 悠利
（明野西小学校）

管 百葉
（王子中学校）

藤井 志帆
（滝尾中学校）

井口 ころ
（明野中学校）

園田 莉子
（西の台小学校）

古川 雄惺
（明治小学校）

衛藤 空樹
（桃園小学校）

高倉 悠太郎
（南大分中学校）

堀内 翔永
（鶴崎中学校）

岡本 穂香
（荏隈小学校）

高津 葉七
（敷戸小学校）

松下 桃子
（舞鶴小学校）

小川 滉太
（城南小学校）

田崎 心都
（西の台小学校）

三田 瑞季
（明野中学校）

川野 睦斗
（佐賀関小学校）

玉井 葵子
（長浜小学校）

南 結菜
（東大分小学校）

紀野 暁臣
（東植田小学校）

登口 隼叶
（大分西中学校）

山本 柚
（高田小学校）

工藤 寛子
（明野東小学校）

徳留 明花
（植田小学校）

佐々木 心愛
（東植田小学校）

平田 叶羽
（東大分小学校）

渋谷 智弘
（判田中学校）

廣澤 あかり
（大分西中学校）